

時折破壊される程度に限られており、それもほとんどはすぐ修復されることになりました。<sup>(1)</sup>

ハガナの目標——パレスティナでのユダヤの多数派獲得

ユダヤ人は自らの国家を創りうる能力をもっていない、とヒトラーが信じていたからといって、彼が親パレスティナ・アラブ派だったということにはならない。パレスティナ・アラブもユダヤ人同様にセム族だったからである。一九二〇年代にはドイツの多くの右翼政治集団が、英帝国に抑圧された諸民族に対し、不誠実なアルビオン（イギリスの古名）の同じ犠牲者同士として共感を表明し始めていた。しかし、ヒトラーはそんな見方を毫も共有しなかった。イギリス人が結局白人だったということが肝心な点であった。

ゲルマン民族の一員たる私は、それでも依然としてインドが他国に支配されるよりはイギリスの統治下にあるのをむしろ望ましく思っているが、その点は度外視しよう。エジプトに荒唐無稽の反乱を待望するなどみじめつたらしいことである。……人間の価値を人種的基础がすっかりしているか否かではかる民族至上主義者として、私は、これらいわゆる「被抑圧諸民族」が人種的に低劣であるとの十分な認識から、我がドイツ民族の命運をこれら民族の運命に結びつけるのは許されないと考える。<sup>(2)</sup>

しかし、一九三六年のパレスティナ・アラブ大衆の反乱は、ベルリンの政府を担っている連中にそれまでの親シオニスト政策を再考させることになった。一九三五年一〇月、テル・アヴィヴ行きの船荷から武器が多数摘発された事件によって激しい動揺がおき、イスラムの人気説教師シャイキ・アル・ディン・アル・クアッサムがゲリラ集団ともども刑務所から脱走した一一月に状況は過熱したものになった。英軍はたちまちアル・クアッサムを殺したが、彼の葬儀は怒りのデモに発展した。危機状態はその後数カ月間続き、一九三六年四月一五日の夜、ついに爆発した。クアッサムの残存ゲリラ集団がトゥルカルム街道で交通を遮断し、旅客の金品を奪い、ユダヤ人二名を殺害した。翌日の夜には二名のアラブ人が報復で殺された。殺害されたユダヤ人の葬儀は右翼シオニストのデモに転化し、群衆はアラブ人のヤッファに繰り出さうとはじめた。警察はこれに発砲して四人が射殺され、テル・アヴィヴの通りでは再びアラブ人に対する報復がおこなわれた。アラブ人による対抗行進がテル・アヴィヴに向けておこなわれ、反乱が続いた。自然発生的にゼネストが展開され、下からのこうした圧力はアル・フサイニのライバル氏族を強いてムフティ指導の下にアラブ高等委員会というかたちの統一組織を発足させた。しかし、この高等委員会は、蜂起の続行が農民たちを永久に指導者のコントロールの及ばないところに導きかねないとおそれたため、ようやくストライキ委員会を説き伏せ、英王立委員会の調査結果報告待ちの状態で一〇月一二日の抗議闘争を中止させた。

アラブの反乱が起こる前までは、シオニズムに対するナチスの後援は熱心であったが、まず本心からのものといえなかったのは見てきたとおりである。しかし、パレスティナにおける政治的騷擾およびピール委員会の任命に、世界シオニスト機構はナチスを説得してパレスティナの地そのものでシオニストとの公式の関わりを持たせられるチャンスを見出した。一九三六年一〇月八日、パレスティナの世界シオニスト機構最高組織ユダヤ機関とヒタフドウト・オレイ・ゲルマニア（パレスティナ・ドイツ移民協会）の合同の代表がドイツ外務省イェルサレム領事館に総領事デーレを訪ねた。シオニストの研究者デイヴィド・イスラエリはこの出来事について以下のように描いている。



彼らはデーレを介してナチ政府を説得し、イエルサレムの代表(デーレ)をピール委員会に出席させ、ユダヤ人のドイツからの出国者を受け入れたいとするパレスティナ側の熱意のために、ドイツはパレスティナ移入者の増大に関心をもっていると宣言させようとした。しかし、デーレは提案をその場で拒否した。公式の理由は、ドイツからの移民増加に対して格別配慮しているとなれば、パレスティナへのイギリスの輸出を損なっている移送問題が露見することは必定である、というものであった。<sup>(3)</sup>

シオニストはナチス以上に関係を拡大することにあいかわらず熱心だったので、その要請がデーレに拒否されたにもかかわらず、さらに接近の動きをやめなかった。ピール委員会の調査団の調査結果は、シオニストの企図にとつて致命的なものと考えられ、当時ユダヤ機関の軍事翼(事実上労働シオニストの民兵部隊)であった組織ハガナは、直接SD(親衛隊保安部)と交渉してよいとするベルリンの許可を得て、一九三七年二月二六日、その密使フアイヴァル・ポウクスをベルリンに派遣し、交渉相手としてアードルフ・アイヒマンをあてがわれた。アイヒマンは親シオニスト、フォン・ミルデンシュタインの子分で、いわばメントール(導師)のミルデンシュタイン同様へブライユ語を学び、ヘルツルを読み、親衛隊保安部内のシオニスト専門家になった。アイヒマンとポウクスの会談はアイヒマンの上司フランツ・アルベルト・ズイツクスの作成した報告に記録されている。それは第二次世界大戦末期にアメリカ軍が押収した親衛隊文書の中から発見されたのであった。それによれば、

ポウクスは民族シオニストである。……彼はパレスティナにおけるユダヤ国家建設に反対するすべてのユダヤ人を自分の敵と考えている。ハガナの人間として共産主義と闘いアラブ・イギリス友好関係を目指すものすべてと戦っている。……ハガナの目標はできるかぎりはやくパレスティナでユダヤ人の多数派構成を達成することである。したがって、この目的達成の必要に応じて、自分の活動はイギリスの情報組織スユレテ・ジェネラルと協力もすれば闘いもするし、イギリス、イタリアとも結ぶ場合がありうる、と彼は述べた。……また自らの政治目標に反しなければ情報提供のかたちでドイツのために働くこともやぶさかではない、と自分のほうから言つてのけた。わけても近東のドイツ外交を支持するつもりだ。もしドイツの通貨管理がユダヤ人のパレスティナ移入をより容易にしてくれれば、イギリスの権益に影響を及ぼさないかたちでドイツ第三帝国のために石油資源を見出そうとつとめるだろう。<sup>(4)</sup>

ズイツクスははっきりハガナとの情報活動協働がナチスの利益になると考えていた。さまざまなユダヤ人のポイコット集団についてもまたナチス幹部の生命を狙うユダヤ人の企てについても最新の内部情報をナチスはなお必要としていた。ズイツクスは見返りに親衛隊がシオニストを助けるのをすすんで認めた。

ドイツから出国するユダヤ人がもつぱらパレスティナに向かい他の国に赴かないかたちでドイツ・ユダヤ人全国代表部にプレッシャーをかけることは可能である。こうした措置は全くドイツの利益のためのものであり、すでにゲシュタポを通じての措置も用意されている。パレスティナでユダヤ人が多数派となる状態を生み出すとするポウクスの計画は同時にこうした措置を通じて促進されることになろう。<sup>(5)</sup>



ズィックスのこうした熱心な肩入れは、パレスティナをイギリスの勢力圏とみなしていたドイツ外務省の共にするところとはならなかった。ベルリンの第一の関心はバルカンの重要な問題でロンドンと了解に達することにあつた。外務省官僚はまた地中海政策へのドイツの介入にイタリアがどう反応するかについても関心をよせていた。したがつて一九三七年六月一日、外相コンスタンティーン・フォン・ノイラートが、ロンドン、イエルサレム、バクダッドに送つた電文は次のようなものとなつた。「ユダヤ人国家（ないしイギリス委任統治下でのユダヤ人の主導する準国家）の形成は、ドイツの国益を損なうことになる。何となればパレスティナのユダヤ人国家は世界ユダヤ人を吸収せず、政治的カトリシズムにとつてのバチイカン市国、コミンテルンにとつてのモスクワ同様、国際法によつて強化された権力的基礎を創り出すからである。したがつてドイツの利害は万一のこうしたユダヤ勢力の権力増大に対する対衝としてのアラブ勢力の強化にある。もつとも、ドイツの直接的な介入がパレスティナ問題の発展に重要な影響力を与えうるとは考えられない（が、それでも利害関係諸国にわが国の立場について無関心にならせないことが望ましい）。どんなことがあつてもパレスティナ・アラブには形だけの支持以上のものを与えてはならない。アラブ民族主義者の熱望に対する了解はこれまで以上にはつきり表明しても、確約はしてはならない。」

#### 将来のイスラエルに対するシオニストの構想

この段階でのイギリスの対パレスティナ政策は、イエルサレムの初代軍政長官、ロナルド・ストーズ卿の回顧録に簡潔に表現されているが、シオニストの「企てはストーズに感謝しなければならぬものになると同時に、イギリスのためには、敵としての潜在力をもつたアラブの大海に浮かぶへ多少忠実なユダヤ

人のアルスター<sup>(1)</sup>を形成することによつて、ストーズ同様にギヴ・アンド・テイクの関係でつながつていた。これこそ、パレスティナを三分割する一九三七年七月のピール委員会の提案の精神であつた。パレスティナのすべてがなおイギリスの支配下にあり、イエルサレムからヤッファまでの小さな地域をイギリスは直轄支配し、ハイファは一〇年間保持し、その後は、二つの細片とそれをつなぐ地域（面積はノーフォーク州に相当する広さ）からなるシオニスト小国家に移管される。小さなシオニスト国家の実体はユダヤ系よりはるかに数の多いアラブ「マイノリティ」を含み、その一定部分は委員会が、パレスティナ残部を獲得するアラブ国家に転属させることも考慮することになつていた。

シオニスト内部の意見ははつきり分かれた。「ユダヤ人のアルスター」がオリジナルのアルスターと異なつていたところは、次の点にあつた。すなわち、自らの考へていたことが分割案によつて満たされたところ、シオニストがけつして考へなかつた点である。彼らのエーレッツ・イスラエルは、アブラハムの旧約聖書の中に出てくる歴史的遺産のすべてを含んでいた。結局、ピール委員会の分割案に対する世界シオニスト会議の回答は、慎重に条件をつけ、実質はイエスを意味したノーであった。細かい分割は拒否したが、シオニスト執行部が今後より有利な交渉を引き出すためにケチをつける権限は与えられていた。

シオニズム運動は一九三七年段階で、それでは独自に、また何百万というユダヤ人のためにどのような国家を思い描いていたのだろうか。労働シオニストは運動の中では群を抜いて数の多い勢力であつたが、リーダーのデイヴィド・ベン・グリオンほどに分割案受け入れを声を大にして主唱した者はいなかつた。一九三七年夏にベン・グリオンはポアレ・ツイオンの世界評議会チューリヒ総会場で、この点では全然不安を抱く必要がない、後になれば必ず拡大する、と厳かに再保証した。